

色彩豊かな木管楽器

現在のオーケストラの形は今から 200 年ほど前、ハイドンの時代からモーツァルトを経てベートーヴェンの頃に完成されました。交響曲にトロンボーンを用いたのはベートーヴェンが最初と言われています。

オーケストラの楽器を、弦楽器、金管楽器、打楽器、そして木管楽器と 4 つに仲間分けすることができます。今日はそのうちの木管楽器のお話です。

木管楽器とはどんな楽器なのでしょう。木の管でできた楽器でしょうか。でも、フルートは金属（銀など）でできています。とはいえ、確かに昔は木製でした。

「楽器なんてできない」と言う人でも、一度は吹いた事のあるのが他ならぬ木管楽器です。誰もが小学校の音楽の時間にハーモニカやリコーダーを教わったことでしょう。今は、ハーモニカが鍵盤ハーモニカにとって代わられましたが、音の出る仕組みは同じで、薄い真鍮の板（リード）がブルブルと震えて音を出します。

リコーダーは、プラスチック製で大量生産され、1本あたり 1,000 円程度と安いので、学校で使われるようになったのでし

よう。今や 100 円ショップにだってあるリコーダー。バッハ以前の時代からの立派な木管楽器です。

私は、15 年ほど前、リコーダーアンサンブルでソプラノリコーダーを吹いていたことがあります。アルトリコーダーまでは穴を指で押さえられるのですが、テナーリコーダーやバスリコーダーになると、楽器に開けられた穴の間隔が広くて指が届きません。そのために、穴をふさぐふたのしくみが楽器に備え付けられています。

オーケストラの木管楽器も穴をふさぐふた（カップ）をキーと呼ばれる金具で操作します。その仕組みは、まるで機械のようです。ひとつのキーを押さえて 2 つ以上の穴をふさぐこともあります。しくみの複雑なオーボエは部品点数が 400 点を超えることもあり、「最も部品の多い楽器」としてギネスブックに登録されるほどです。

そんな木管楽器も、その「音の作り方」ときたら全く異なります。



キーのついたバスリコーダー。長さは 1メートルを超えるものも。

例えば、フルートは空き瓶の口に息を吹いて「ポー」と鳴らすしくみに、オーボエとファゴットは「豆笛」の発音のしくみに似ています。クラリネットは一枚の葦の板が震えている。言ってみれば、ハーモニカの音が鳴る仕組みと似ているのです。

つまり木管楽器とは筒の穴を指でふさぎ、様々なもの（リードと呼びます）を震わせて音を作る管楽器の仲間なのです。（ジャズや吹奏楽でよく使われるサクソはれっきとした木管楽器です。）

このように、オーケストラの四種類の木管楽器は、実に個性的な楽器の集まりです。金管楽器は唇、弦楽器は糸の振動で鳴るように、仲間内の楽器同士では音の作り方が同じなのですが、木管楽器はそれぞれの楽器の発音方法が違うため、一緒に演奏すると今までなかった新しい音が出現します。

それは、まさに絵具を混ぜ合わせたような印象です。金管楽器や弦楽器だと同色の色合いになりますが、木管楽器では黄色と青を混ぜて緑になるといった感じです。作曲家はその辺を熟知していて、まるで画家がパレットの上で絵具を混ぜるように木管楽器を混ぜ合わせ、色彩豊かな音楽を作っているのです。